

第 3 回中原区区民会議課題調査部会会議録

1 開催日時 平成 25 年 4 月 23 日（火） 午後 2 時 00 分～午後 4 時 00 分

2 開催場所 中原区役所 5 階 501 会議室

3 出席者

委 員 板倉部会長、成田副部会長、青木委員、稲富委員、梅原委員、反町委員、但野委員、
富岡委員、中森委員

事務局 小野副区長

企画課 今井課長、江口担当係長、倉見担当係長、深谷職員、野並職員、大崎職員
こども支援室 諏佐室長、高岡担当課長
社会空間研究所 中島さん、栗林さん

4 議 題

（1）正副部会長の互選（公開）

（2）会議録確認委員の選任（公開）

（3）審議テーマ「子育て家庭と地域をつなぐ人と場づくり」に関する調査検討について（公開）

5 傍聴者 なし

6 会議内容

（1）正副部会長の互選

全会一致により、部会長に板倉委員、副部会長に成田委員を選任した。

（2）会議録確認委員の選任

青木委員を選任した。

（3）審議テーマ「子育て家庭と地域をつなぐ人と場づくり」に関する調査検討について

事務局 資料説明

板倉部会長 資料は詳細に分類されているが、各委員自由に意見を出してほしい。

成田副部会長 現在の人口ピラミッドを考えると、今課題の対象となっている子どもたちは 10 年先には小中学生に移行する。地域で子育てを推進してくれる人の育成が早急な課題。子どもの活動範囲が広がると、支える地域力が必要となってくる。保護者を交えた親たちに地域の一員としてかかわってもらうことが大切。

転入者に地域の様子を把握してもらうことや、身近な人との接点を持ち、子どもを安心して外に出せるためのアイデアが必要。子育てサロンは 10 年たつが、こことのつながりを持ってない、なかなか出てこられない人に対してどのように支援するか考える必要がある。

富岡委員 地域の人と子育て世代の交流は難しい課題。子育てサロンと高齢者会食会と併せて行えるとよい。保育園でも地域の人と交流する取組を行っているが、とてもよいと思う。地域への広がりが出てくるのでは。

事務局 子育てサロンと高齢者会食会を一緒に開催する場合の課題は。

富岡委員 赤ちゃんが多いので、ケガさせないように注意が必要かもしれない。

青木委員 サロンなどに来られない人に対しては、いかに来てもらうかを考えることが大事。丸子地区では、福祉協力員制度を昨年の2月から始めた。地域の見回りをお願いして、孤独死、孤立死を防ぐ取組を行っている。民生委員の負担を軽減するための取組。子育てサロンもボランティアとしてお願いしている。

こども支援といっても、対象は0歳から19歳まで。それぞれの段階に応じた場が必要だと思う。過ごす場所としては、0歳児は95%が家にいる。1歳は70%、2歳は60%。3歳までがサロンの対象で、4、5歳は保育園・幼稚園。6歳からは小学校、中学校。それぞれの段階でつながりが大事。どういう人がかかわるか。

成田副部長 子育てサロンに一度来てもらっても、来られなくなるケースもある。こんにちは赤ちゃん訪問で接点を持って、誘ったのだが、知らない人の輪の中になかなか入っていけない。仲間同士で行くのはいいが、一人だと厳しい。また、知らない人から誘われる警戒心を外すこともけっこう大変。

但野委員 知らない人だと、挨拶するだけでも警戒されてしまう。慣れてくればいいのだが。小さい子どもの母親は、守りの態勢になる。ただ、話す人がいないのはつらいので、孤立するが、話したいという希望はあると思う。興味を持たせることやきっかけが必要。外国籍の人は言葉の壁が大きいと思うがどうか。

中森委員 最初の壁は言葉。最近は仕事をしている人が多く、子どもは平日保育園に行っている。そういう場合、情報があっても参加しない。家にいる人に対しては、国際交流センターでボランティア登録しているので、子育てサロンに参加しやすいように、国際交流センターに問い合わせてもらえるとよい。あと、小さい子がいると、保健所に定期健診に行く機会があるので、その時に情報が入るといいと思う。行政からの呼びかけであれば、安心して足を運びやすい。専門家のいるところに相談しに行きたいのでは。

反町委員 いかに信頼してもらうかという取組は、地道だが必要なことで、大変だと思う。それ以外のやり方として健診の機会が高い効果がある。イベントに参加する人は、働きかけがなくても参加する。最初の一步を踏み出してもらうために、いかに多くの人に興味を持ってもらうか。健診は非常に良い機会。2年前に行った健診時のアンケートやイベントはうまくいったと思っているが、当時は、まず取り組むということが大事だった。内容を練って踏み込んではいなかったもので、再度やるとしたら、興味を持ってもらうための踏み込んだ企画が必要と考えている。いずれにしても、1回だけの取組でなく、継続することが大事。

事務局 健診の機会を捉えて、という意見が出ているが、どのくらいの頻度で行っているのか。また、1回あたりの人数は。

事務局 月に9回ある。3か月健診が3回、1歳半が3回、3歳児が3回。3か月健診は人数が多いので、月に4回やることもある。1回あたり70～90人程度来る。

但野委員 健診時に、チラシを配ったりしたことはないのか。

事務局 情報として出している。また、3か月健診の待合スペースで子育てサロンのビデオを流しており、1歳半健診の時に、子育てグループのDVDを流したり、おでかけマップを配ったりしている。必要な情報を出しているが、どの程度活用されている

のかははっきりとはわからない。

但野委員 視覚的なもの、サロンで取り組んでいる写真などが掲示してあるといい。絵本などもいいのではないか。子どもの反応を見ながら、親のほうも感じてもらえれば。

青木委員 場所としては、公園に居場所を求めている。公園の整備、安全性の確保が必要。老人いこいの家も活用できるのではないか。担い手としては、育成会の人や一人暮らしの高齢者がサロンのボランティアとして参加してくれればよい。敬老会にはなかなか入りたいが、特に男性が少ないが、いかに引っ張り出すか。

梅原委員 私はボーイ・ガールスカウトの活動をしているので、関わっている子どもは年長より上になるが、今回の資料で出ている課題は、ボーイスカウトで持ち上がる課題によく似ているように感じた。

ボーイスカウトでは、世代間の交流という意味では、新しく引っ越して来た子の参加を促すにはイベントが効果的。大人が話し合いを誘導するのだが、子どもが自分で出した案を自分でやったように感じさせることで、子どもたちがまとまる。中原区はイベントが多いので、企画段階から子どもも加わらせるようにするとよいのでは。子育てリーダーを育てるのは大変で、よいリーダーだと子どもは育つ。ボーイスカウトに入れるためには、親が勉強会に出席する必要がある。私自身、子どものことに関わり少なかったが、半強制的に勉強会に参加して、活動に興味を持ち、熱心に参加するようになった。

稲富委員 富士通では「春まつり」を行っている。今年は5月19日に予定しているが、子どもを呼ぶためには大人も楽しめるようなことをする必要がある。外に出てもらうために効果的なことを考えると、小さい子を呼ぶには、母親が興味を持つものが必要。小学生くらいだと、母親と子どもの両方の興味を持たせること。興味を持てば自然に広がるし、楽しそうなら気になる。子育てサロンに行けない人に対しては、お出かけサロンではないが、まつりのようなイベントの機会にサロンを出してみてもどうか。親子がともに楽しめる場をつくることで、両者にとって意味のある場になる。いろんな年齢の人、立場の人に楽しんでもらう取組を考えたい。外国人が集まるサロンがあれば、外国籍の人が来やすいということもあるだろう。いろんなことを試して、横のつながりを作ればいい。

梅原委員 企業の協力で、スポンサーがつくといい。

反町委員 継続するためには、いかにお金をかけないでやるか、ということも重要。場所を提供してもらえるだけでもありがたいのでは。住宅展示場でやった例もある。

富岡委員 10年前に子育てサロンを始めたころは、児童虐待防止の意味もあった。サロンが多くなってよいのだが、サロンに来られない人への対策が課題として残ってきたと感じている。情報提供はよくやっていると思う。相談・口添えのような役割が大切で、行政の言うことには耳を傾ける。周りに知られずに、内緒で相談できる場所が必要だろうと思う。福祉健康まつりで子育てサロンの写真パネル置いていたが

あれなど、健診時に置いてもいい。視覚から入ってもいいし、お話・会話から入ること、相談できる場所も必要。出て来ない人への対策が難しいのは、個人情報保護法で、必要な人までたどり着かないということもある。

成田副部長 子育てサロンは基本的に待ちの姿勢。リピーターとして来てくれる人は、行政からの情報が手に入ることが大きいようだ。やはり、専門の保健師が来てくれる意義は大きい。新しくできたマンションの住民情報はわからないので、サロンの運営方法が従来通りでいいのか、変える必要がないのか、不安になる。

青木委員 サロンに保健師が来るのが月1回だが、サロンには、住んでいる地区以外の遠いところでも行くので、保健師への相談はいつでも可能である。

中森委員 子育てサロンで相談する時に、子どもの世話をしてくれる人がいるのか。

成田副部長 特別に相談の時間を設けているわけではないので、そのあたりはあいまいだが、自由に子どもたちを遊ばせているときに相談していることが多い。また、必要に応じてスタッフが保育する。

中森委員 退職した人など、子どもを見たい人をサロンに呼んで、子どもの世話をしてもらえば、その後につながってくるのでは。

事務局 今日の話の前半は、いかに来てもらうかという観点で、一つとして定期健診の機会の活用について、以前に行った子育てふれあいカフェの充実などが考えられた。課題としては、年代別に興味を持ってもらうような取組をどうするか。後半では、担い手として活動している人の話から、いくつか団体はあるのではないかとということ。ボランティアを知ってもらい、担い手として来てもらうための取組や、出てきてもらうために相談しやすい環境づくりが必要などの意見が出ていた。さらに、企業の力の活用や、面倒を見たい人と見てもらいたい人を結びつけるための仕掛けができないか。

梅原委員 国際交流センターで、インターナショナルフェスティバルがあるので、ぜひ来場してもらいたい。

事務局 外国人への情報提供という点で、中原区は国際交流センターがあり、特徴だと思うので、センターをどう活用するか、考えていく必要がある。

事務局 青木委員から伺った福祉協力員制度の話は大変参考になった。こういう取組が広がってくるとよいと思う。また、健診の機会の活用は効果的に行いたい。

事務局 見てくれる人と見てほしい人との結びつきについて、何かご意見は。

反町委員 「結びつき」という言葉が非常に漠然としている。見てくれる人とのマッチングを、安全に、いい形で行おうとしても既存の取組や組織はない。つなぐ場やきっかけを探すのに直接連絡をとるのは難しい。窓口を設けたり、組織化してマニュアル的にやるのがよいのか、考えながら聞いていた。わかりやすい形が必要。

事務局 有料のサポートサービスあるが、子どもを見る人の登録が少ない。

事務局 今日の議論のまとめとして、出てこない人をどうするか、という点では、健診の

機会の活用、具体的には子育てふれあいカフェの充実があった。年代別の人の興味を引く工夫をどのようにするか、という点。面倒を見る人については、今活動している人の活用とボランティアの育成、いかに相談に来てもらうか、それぞれのネットワークや運営する主体を次回に議論したい。

板倉部会長 本日のまとめは以上のとおりとする。

以 上